告白（１）

隣で布団を敷いて寝ている柊が気になって、昨夜はほとんど眠れなかった。

柊は柊で睡魔に身を委ねることができなかったのだと思う。お互いに逆を向いて横に鳴っていたために顔は確認できなかったものの、柊の寝息が聞こえたことはなかった。

８時に設定した携帯電話の控えめな音量のアラームは、微睡みを解くには充分なものだった。

「楡、お仕事は？」

やはり柊は眠れていなかったようで、声は寝起きのダルさなど感じさせないはっきりとしたものだった。明るいトーンには、布団に入る前にあれあｄけ空いていたことの残滓がない。